

国語科教職を受講して

117j009 今村 翔太

・私が中高国語科教諭をめざしたきっかけ

私は小学校のころに受験をし、中高一貫校の進学校へと入学した。そこで、生徒たちを偏差値の高い大学へと進学させ、有名な企業へ就職させることを目標とする野心あふれる教師たちに日々疑念を感じながらも教えを受けてきた。そんな中で私は中学一年生から落ちこぼれた。そして高校になるとそれは激化し、成績の良い生徒たちは一クラスに集められ教師たちの手厚い指導の下受験に挑んだ。落ちこぼれた私かというと、友人といかに面白く火薬をつかえるか、いかに面白く校則の穴をついたファンタスティックかつエキセントリックな行動を行えるかを考え、日々その技を磨いていた。そんなある意味では最高に充実した日々を送っていたある日、進路についての希望調査が行われた。私は友人たちとともにいかにマニアックな職業を進路調査の紙に書くかを勝負していた。そして、わたしが第一志望の進路に「ポテトチップスの味見をする専門職」と書き終えたときである。隣で「流れを利用してエスカレーターの手すりを拭く仕事」と記入していた友人がふと「正直、夢なんてなんもない。将来やりたいことなんてなにもないし何をすればいいのかも、何をしたいのかもわからない」と私に言い放った。私は第二志望の部分に「鷹匠」と書き込む手を止めふと考えた。高校生に進路をきいたところで何が浮かぶだろうか、将来の夢を真剣に考え、その決めた目標に向かって進んでいる人間は一握りで、ほとんどの人間は何となく大学へ行き、何となく会社に就職することになるのではないかと。そして、そんな迷える子羊を救うことができるのは主たる神か生徒の身近にいる大人の教師だけである。しかし私は無神論者であったので、神としてこの世に顕現するか教師になるかの二つの選択肢から教師を選択し、第三希望に書くつもりであった **YouTuber** をやめにして「教師になるために大学に進学する」と進路志望の用紙に記入した。たしか高校一年生の冬のことである。そしてそこからは勉学に励み、必死に努力した。そして来たるセンター試験の日、私は重大なことに気が付いた。時計を忘れたのである。仕方がない私は前に座っている見

ず知らずの人間が机に置いている腕時計を盗み見ながら試験を受けるという苦肉の策を実行した。今思えばかなりスリリングかつリスキーなカンニングぎりぎりの作戦だった。そして何とかセンター試験を終えたわけだが、この苦肉の策のおかげか、東京都のいくつかの大学（俗に言う大東亜帝国）でA判定を受けることに成功した。そして見事に天狗になった。天狗はそのまま各大学の試験に挑んだのだが、まるで神隠しでもされたかのように知識が消え去っており（センター試験で余裕の出た私はスマホアプリに熱を上げていたのである）見事に惨敗した。その結果たるや、すべての大学で不合格か補欠合格（一つも連絡は来なかった）という不名誉なものだった。今思えば当然の話である。授業中に出される質問、問題をすべて大喜利とはき違えていた生徒が二年程度努力したところでちゃんと努力していた人間にかなうわけがない。しかし不幸なことは続くもので、センター利用でA判定を受けていた学校たちもことごとく不合格となり、私は高校の卒業式の日も受験申し込みのために街へ繰り出し、とうとう卒業証書を壇上で受け取ることなく卒業してしまった。そして絵にかいたような自暴自棄に陥って、四月からは大学生でも鷹匠でもなくニートになるんだと腐っていた。そんな私を見かねた部活の顧問（私は当時柔道部に所属していた。強かったんだぞ）が私にこう話しかけてきた。「お前はまだ試合時間はのこっているのにあきらめるのか、いまからでも受けることができる大学はいくらでもある、一緒に探していこう」。私はこの柔道にかけたウィットに富んだセリフはどれくらいかけて考えたのかを気にしつつも深く感銘を受けた。もしも教師になることができたならば、必ず顧問のように生徒に希望を与える、勉強だけではなく、その生徒の人生を導く存在になると誓った。そこから顧問とともにインターネットをいろいろと調べ、この聖学院大学の試験が三月末までであることを知ることができた。そして慌てて申し込み、何とか無職ではなく学生という社会的立場を手に入れたのである。

・国語科教職をここまで受けてみての感想

私はこの大学に入り、いの一歩に教職課程を履修することを公言した。大学に入学してできた友人たち（二浪した者と一浪した者、ギリギリ現役の私、まさか全員の年齢が違うとは思わなかった）もたまたま教職課程に興味を持っており、皆で仲良く履修する運びとなった。三人で仲良く一年秋に開講し

た教職必修授業に参加した時、私たちは衝撃を受けた。ガイダンスの時よりも多くの人間が授業に参加していたからだ。まさか教職ガイダンスに参加せずに授業に参加するとは、完全に虚を突かれた。きっと私の考えも及ばないような強者たちなのだろうと思ったが、彼らは当然のように単位が修得できず、二年生からは顔を合わせることがなくなった。

さて、二年春になると、国語科教育法や教えるための古典など、多くの専門的な授業が始まる。まさか二年春になるまでに二桁いた教職履修者が八人まで絞られるとは思ってもみなかった。まあ、そんな話はどうでも良いことなので授業の感想に移りたいと思う。

まず国語科教育法について、一言でいうならば目から鱗だった。授業を行う上で、教師が恐ろしい量の教材研究を行っていることを知ったのだ。いままで授業といえば教えられる側として「この教師は30点だな」と品定めていた不届き者の私だったが、教える側になるとそうは言われてられない。熊谷先生から投げかけられる考えさせられる質問、頓珍漢なことを答えて熊谷先生を困らせる仲間、それを嘲笑していたために飛び火し指名されしどころもどろろする私、などとまったく高校までの余裕を出すことができない。九十分間の授業でフルに脳を動かしもの考える。ご教授いただいている内容だけでなく、熊谷先生の一举一動もしっかり目に焼き付けてこれからの糧にしようと思わせてくれる素晴らしい授業だ（決してこれからも熊谷先生にお世話になるから媚を売っているわけではない、本当に）。

教えるための古典について。この授業は国語、特に古文漢文に自信のない生徒にはありがたい授業といえるだろう。この授業では、古文漢文を一から確認し、生徒に教えられるだけの知識を付けさせてくれる内容となっている。教えてくれるのはまさに古文漢文のエキスパートと呼ぶべき木下先生と濱田先生だ。このお二人にかかればどんなに高校で古文漢文をやってこなかったとしても安心、私も卒業するころには雅な和歌を女性に贈り、暇さえあれば論語を読みふける素晴らしい人間になっていることだろう（国語科教育法と同じように、媚びているわけではないことはご承知いただきたい。特に濱田先生は私のゼミ担当の教授であるので変な誤解はしていただきたくない）。この二つの授業は三年生になっても続く授業で、国語科教職の中でも中心的な授業である。ちなみに私の代は恐ろしい勢いで仲間が教職を去り、中学免

許まで取得するのは私を含めて二人という恐ろしい状況になっている。どちらか一人が休むと先生とマンツーマンで授業を行うことになるという恐ろしい状況だ。

・授業でのエピソード

これに関しては、あまり具体的に言ってしまうと教職での私の立場が危ぶまれるのである程度濁させていただこうと思う。

ある授業で先生がおっしゃっていたエピソード。先生が高校に勤務なさっていた時（ツツパリの全盛期）に、バットをもって教員室に殴り込んできた生徒がいたという。先生はそれを三叉で取り押さえたというエピソードだ。これを聞いたときに私はすぐに思った。それは三叉ではなくさすまたではないかと。さすまたといえば「C」の形である。これならば暴れる生徒と距離を取りつつ無力化することはできるであろう。しかし三叉となると形は「E」である。これでは生徒を無力化する前に生徒にとどめをさしてしまうのではないだろうか。こんなお茶目な言い間違いをなさる素敵な先生の授業がある。

これも個人の特定をされてしまうとその先生に申し訳ないので授業名は伏せる。ある授業で外部講師の先生を招いていた。その先生がどうしても東京03の豊本明長にしか見えないのである。似ているなどというレベルの話ではない。最初にお会いした時、日本が国際法に背いてクローン技術の実験を行っているのかと疑ったほどだ。ただ、実験をするにしてもなぜ豊本を複製したのかという疑問は残るが。東京03ファンの皆さんは先生を目当てに教職の授業を受けてみるのもありかもしれない。

この他に発達障害や知的障害をもつ方々のことについて、彼らとの接し方などを学んでいく授業もある。それについて話す先生方の態度は常に真剣で、その中でも、ある先生がおっしゃっていた「発達障害というものは医師にしか診断できない。しかし教師が生徒を勝手に発達障害と決めつけることが多々ある。これはその生徒だけでなく発達障害を抱えた方にも失礼だ、決してしてはいけない行為だ」という言葉は、普段温厚な先生が声を荒げていらっしやっただけに深く心に残っている。

・これから国語科教職を始める方へのアドバイス

私は若輩者であり、人にアドバイスを言えるような人間ではないがこうして文章を書いているのでしっかりと役目を果たしたいと思う。

まず、正しい生活習慣を身に着けることがもっとも重要である。一限の授業を寝坊により取り逃してしまい教職を去った人間は数知れない。教職の授業というのは不摂生をしている人間をふるい落とすかの如く一限に入れられていることが多い。ただ、どうにか頑張って授業に来たところで授業を聞いていないと意味がない。半目をあげ、足を引きずるようにふらふらと歩いて教室に突入してくる通称ゾンビたちは学生証をリーダーにタッチするとその役目を終えたかのように机に突っ伏し活動を停止させる。三分間戦い抜いたウルトラマンといえば聞こえは良いが、本当の闘いはリーダーをタッチした後の九十分間なのである。そしてこのゾンビたちはテスト前になると活動を再開する。そう、ノートの写しをせがむのだ。その様子はまさに地獄絵図、人間に嘔み付こうと襲い掛かってくるゾンビそのものだ。教職を志す方はこうならないようしっかりと早寝早起きを心がけてほしい。夜遅くまで起きていてもどうせ朝遅くに起きることになり朝の時間を無駄にするだけなので、実質早寝早起きと活動時間は変わらない。

第二に、自分が興味を持ったことを何でも行うことが大切だと私は考える。教師たる者、ただ勉強ができるだけでは務まらない。いくら勉強ができようと口下手な者、勉強以外できない者には魅力なんてものはないからだ。魅力のない人間に人はついていかない。それは簡単なこと、ついていったところでつまらないからだ。人間の質、魅力というものは勉強だけで決まるわけではない。一見くだらないものでも話題になり、それがトーク力、ひいては人間の魅力につながると私は考える。だから興味を持ったことは是非なんでも取り組んでほしいと思う。

第三に、多くの本を読んでおくと良いだろう。それは小説でもコラムでも、何なら漫画でも構わない。国語教員を志す者が活字を苦手に行っているようでは生徒に何を教えることができようか、という話である。小説は特に、国語科教育法で二週間に一度ブックレポートという形で読書を課される。この前準備として活字が苦手な者は漫画から、漫画は読める者は簡単な小説などを読んでおくと二年生以降困らないだろう。ちなみに私は、クリスマスから正月にかけて遠藤周作の「沈黙」という暗く苦しい小説をブックレポートとして読み、少し悲しい気持ちになった。